

十和田八幡平国立公園

独特な温泉文化

原生林が彩る静謐の湖水

息づく火山

奥山の湯治場

(十和田

八幡平国立公園の公式スローガン)

十和田八幡平国立公園は二段階で発展しました。十和田湖・奥入瀬・八甲田山系を擁する北部は、1936 年に国立公園に指定されました。それから 20 年後、その南の八幡平区域も公園の指定範囲に含まれました。公園の北部・南部のいずれも火山と温泉を擁し、それぞれの地域独特の景観や文化が存在します。

1936 年に北部が国立公園に選定される前から、酸ヶ湯温泉を中心とする八甲田山地域は温泉宿で知られていました。この地域は年間の半分は深い雪に覆われていたため、居住者もごくわずかでしたが、人々は苦勞しながらも湯治場と呼ばれるこの地の宿に湯治に訪れていました。この地域が国立公園指定を受けると、宿周辺には駐車場やキャンプ場、トイレなどが整備され、地域は徐々に登

山客やスキー客で賑わうようになりました。

1956 年に八幡平地域が国立公園の一部となった当時、この地域の温泉は未整備でした。これらの温泉は近隣住民、特に農閑期の農民に人気がありましたが、国内の他の地域の温泉に見られるようなリゾート地の雰囲気は備えていませんでした。この地域の温泉には、多くの場合バラックのような簡素な建物に長期滞在者のための自炊設備や地面に敷いた筵を通して地熱浴ができる「オンドル」という仕組みがついているなど、固有の特徴がありました。旅館以外に住む人のいない過酷なこの国立公園の風景は、独特の温泉文化にぴったりの背景だと考えられたのでした。

貴重な文化景観

山岳や火山、噴気孔、ブナ林を背景に、独特の文化を持つ古い木造の湯治宿が並ぶという十和田八幡平の一風変わった風景は、「文化景観（cultural landscape）」（環境庁の用語で、周囲の自然環境と調和しつつ暮らす人々によってつくられた環境を指す）と形容されます。1986 年に策定された八幡平地域計画では、地域の湯治文化に関連する風景の保存と活性化が強調されました。

自然への玄関口

こうした文化景観の存在にもかかわらず、十和田八幡平国立公園に占める私有地の割合は、わずか 5%と日本の全 34 国立公園の中で最低水準となっています。

温泉宿は大抵、森の奥深くや山の高いところ、辺鄙な谷間、火山の近くなど、国立公園内でも特に

僻地にあります。その多くは、冬には豪雪によりアクセスできなくなるため営業を停止します。しかし、このような辺鄙さは、これらの宿が自然の中に身を置くのに絶好の場所にあるということでもあります。こうした宿の中には、ハイカーがハイカーのために作った、山道の入り口の便利な場所に建てられているものもあります。宿と宿を結ぶ道を辿って、毎晩違う温泉宿に泊まりながら、公園内を縦横無尽にトレッキングすることができます。

もっとゆるやかなウォーキングコースもあります。例えば、玉川温泉自然研究路や後生掛自然研究路は、どちらも 30 分ほどで歩ける短いコースで、途中火山ガスや泡立つ池、硫黄の多い環境に生育するピスタチオ色の地衣類「イオウゴケ」(*Cladonia vulcani*) など、地熱に関する様々な自然現象を見ることができます。つまり、十和田八幡平国立公園の古い湯治場を訪れることは、より素朴な時代に立ち返り、自然と再びつながるための素晴らしい手段です。